福島県立医科大学 学術機関リポジトリ

Title	文法化から見た複合前置詞および動詞派生前置詞の発達
Author(s)	中山, 仁
Citation	福島県立医科大学看護学部紀要. 6: 1-8
Issue Date	2004-03
URL	http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/35
Rights	© 2004 福島県立医科大学看護学部
DOI	
Text Version	publisher

This document is downloaded at: 2024-04-16T10:16:35Z

Fukushima Medical University

福島県立医科大学看護学部紀要 1-8, 2004
Bulletin of Fukushima School of Nursing

■ 論 説 ■

文法化から見た複合前置詞および動詞派生前置詞の発達

中山　仁[1)]

The Development of Complex Prepositions and Deverbal Prepositions in a Theory of Grammaticalization

Hitoshi NAKAYAMA[1)]

Ⅰ．はじめに

前置詞には in, on, for などの単一語によって表されるもの（simple prepositions）の他に，instead of, in spite of, with regard to など，前置詞を含む２語以上の句によって構成されるものがある．後者は複合前置詞（complex prepositions）と呼ばれ，統語的・意味的に前者と異なる特徴を持つ．他に，considering, regarding, as regards などのように，元来動詞であったものが前置詞としての機能を持つようになった動詞派生前置詞（deverbal prepositions）も存在する．(1)は複合前置詞，(2)は動詞派生前置詞の例である．

(1) a. We should do something *instead of* just talking about it.
　　b. *In spite of* her success, Spencer continues to get depressed.（*Longman Advanced American Dictionary*）
(2) The police are anxious for any information *concerning* the woman's whereabouts.（*Ibid.*）

本稿では複合前置詞として with regard to, in respect of, as to などを，動詞派生前置詞として regarding, considering, concerning などを取り上げ，これらの発達について，文法化現象も視野に入れた具体的な検討を行う．結論から言えば，両者とも時間の経過とともに統語的な制約が弱まり，次第に談話機能を高めるようになったと考えられるが（秋元　2002），ここではさらに詳細な検討を加え，個々の語句の特徴と語句全体に関わる特徴についても明らかにする．これらはいずれも関係・関連（respect）を表す語句という点で共通しているため，語句間の類義関係および「関係・関連」の概念と文法化との関わりについても新たな知見を得ることができる．

Ⅱでは複合前置詞句のタイプや通常の前置詞句との差異を確認した上で，複合前置詞の構成上の特徴や統語的・意味的特性について考察する．その際，これらの歴史的変化も考慮に入れることによって，複合前置詞句が次第に談話機能を備えるに至る過程を見る．Ⅲでは特に関係・関連を表す複合前置詞の発達に焦点を当てる。Ⅳでは動詞派生前置詞の発達過程について検討する．Ⅴでは一部の類義表現と文法化の関係，Ⅵでは前置詞全体から見た関係・関連の概念の発達について考える．

Ⅱ．複合前置詞の発達

１．複合前置詞のタイプ

複合前置詞は２語で構成されるものと３語で構成されるものに分けられる．２語の場合，第１要素は副詞，形容詞または前置詞，第２要素は前置詞から構成される（apart from, regardless of, but forなど）．

(3) I sat *next to* an old lady on the train.（Quirk et al. 1985）

instead of も２語で構成されるが，これは元来 in（the）stead of であったものが次第に変化してできた例である．これらは第１要素の選択肢が比較的限定されているため，種類や意味に関しては３語の複合前置詞と比べると生産性は低いように思われる．Quirk et al.（1985: 669）のリストを見る限り，意味的に場所や位置関係を表すもの（inside of, near to）や，位置関係から派生した時間関係を

１）福島県立医科大学看護学部基礎部門外国語

Keywords: complex prepositions, deverbal prepositions, grammaticalization
キーワード：複合前置詞，動詞派生前置詞，談話標識，文法化
受付日：2003.10.20　受理日：2003.12.5

表すもの（preliminary to, prior to）が多いようである．

3語の複合前置詞はその意味，種類において2語の場合より豊富である．これらは(4)のような構成をしており，Prep1，Prep2のパタンは(5)のようになる（括弧内は例の一部）．

(4) Prep1 + Noun + Prep2

(5) a. in + Noun + of (in case of, in spite of, in view of)
b. in + Noun + with (in common with, in contact with, in line with)
c. by + Noun + of (by dint of, by means of, by virtue of)
d. on + Noun + of (on account of, on behalf of, on top of)
e. other types:
as far as, for (the) sake of, in exchange for, in addition to, with/in regard to, with/in respect to, in return for
(*Ibid.*)

Akimoto (1999)，秋元 (2002) によれば，「複合前置詞が増え始めたのは15世紀以降であり，構造上多い順に上げると，in + NP + of が圧倒的に多く，18世紀に関して言えば，in + NP + with (in love with), at + NP + of (at the expense of), for + NP + of (for the sake of)，そして on + NP + of (on account of) の順」となる．

2．統語的緊密性

複合前置詞は語句が一まとまりとなって1語の前置詞と同様の機能を果たすという点で共通するが，それぞれの構成要素の緊密性という点では段階性が認められる．Quirk et al. (1985) は以下の9つの点から複合前置詞と一般の前置詞句（on the shelf by (the door)）との統語的緊密性の程度を比較している．

(6) a. Prep2 を別の前置詞と入れ替えることができるか
on the shelf at (the door) [*in spite for]
b. 名詞の数の単複は認められるか
on the shelves by [*in spites of]
c. 名詞に冠詞を付けられるか
on a/the shelf by, on shelves by [*in a/the spite of]
d. Prep1 を別の前置詞と入れ替えることができるか
under the shelf by [*for spite of]
e. Prep2 とその目的語が所有格代名詞＋名詞で言い換えられるか
on the surface of the table ～ on its surface
[in spite of the result ～ *in its spite]
f. Prep2 とその目的語が省略できるか
on the shelf ϕ [*in spite ϕ]
g. Prep2 とその目的語が指示代名詞＋名詞で言い換えられるか
on that shelf [*in that spite]
h. 名詞部分を他の同義語と入れ替えることができるか
on the ledge by [*in malice of]
i. 名詞を形容詞で修飾することができるか
on the low shelf by [*in evident spite of]

以上の基準に照らし合わせて見ると，in spite of は(6)の項目の全てにおいて不可となる．したがって，統語的な緊密性の点で言えば典型的な複合前置詞であり，単一語の前置詞 despite や notwithstanding と同義であると考えることができる．一方，例えば in comparison with などは(d)，(f)，(h)に関しては成立するので，in spite of ほどは緊密性が高くないと言える．

3．文法化との関係

(6)を文法化の観点から捉え直すとどうなるであろうか．文法化は一般に内容語が統語上の独立性を高め，意味内容の弱化または消失（意味の漂白）による脱範疇化をもたらし，さらには音韻的弱化を伴って次第に機能語へと変化する過程である．統語上の独立性については特に(6a)，(6d)，(6e)，(6g) などと，脱範疇化については(6b)，(6c)，(6h)，(6i) と関係づけることができるであろう．たとえば，(6e) に挙げた所有格代名詞と名詞による言い換えが不可になるのは，instead of（元は in stead 'in place'）の歴史的変化において in one's stead が in stead of ほどは使用されなくなる過程の中で捉えることができる．また，(6b)，(6c) はそれぞれ屈折語尾，冠詞の消失により，名詞性が失われる過程と重ね合わせることが出来る（in the stead of ～ instead of；もちろん，堅い文体では現在でも in the stead of は可能）．また，(6h)，(6i) は意味内容の弱化により，本来の語義と同義の語による入れ替え，および，本来の語義を修飾するのにふさわしい形容詞との共起ができなくなることと解釈することができる．一方，(6f) で挙げた Prep2 とその目的語の省略については，むしろ文法化がさらに進んだ形と捉えることができる．ただし，これは統語的緊密性と矛盾することを意味するものではない．なぜならば，(6f) の形は一旦(複合) 前置詞としての範疇を確立した後，さらに（談話機能を持った）副詞へと変化したものであるので，前置詞としての統語的緊密性とは別の次元で捉えるべきものであると言える．

ここで簡単に文法化と談話辞（談話標識）との関係について触れておく．Hopper and Traugott (1993) は文法化のクライン (cline) として(7)のような一方向性 (unidi-

rectionality）を持った過程を示した．

(7)　content item>grammatical word>clitic>inflectional affix

さらに，Traugott（1995）では，副詞句（前置詞句も含む）が以下のような過程を経て談話標識へと変化するクラインを示した（discourse marker は discourse particle の一部と考える）．

(8)　clause-internal adverbial>sentence adverbial>discourse particle

したがって，複合前置詞の発達についても談話標識までの変化を視野に入れる必要がある．

しかし，いずれにせよ(6f)も文法化の関与を考える上では有意義な項目であることに変わりはない．以上のことから，(6)は複合前置詞がその成立，発達において文法化との関わりがあることを示す証拠として捉え直すことができるであろう（このような視点で考えると，典型的な複合前置詞は in spite of よりもむしろ in addition to の方がふさわしい．なぜなら，この句は in addition だけで独立して用いることが可能だからである．歴史的な順序から言っても，（談話機能を持つとみなされる）文頭の In addition の出現は In addition to より後になってからであり（*Oxford English Dictionary* によれば In addition to の初出例は19世紀初頭で，In addition の場合は19世紀末近くになってからである），文法化が進んだ結果脱範疇化が起こったと考えられる．

文法化の観点から考えると，複合前置詞の発達は言語変化の途上に位置付けられる．これは音韻的弱化も考慮に入れると　(6)で例としてあげた in spite of も例外ではない．現代のくだけた会話では in spite of の Prep1 である in が脱落して spite of となることがある．これは in fact が談話標識に発達する過程において冒頭部分の音韻的弱化が起こって 'nfact' のようになるのと平行している(Traugott 1995)．したがって，in spite of も場合によっては今後さらに発展する可能性を残していると言えよう．

Ⅲ．関係・関連を意味する複合前置詞

前節で見たとおり，複合前置詞は文法化の過程と一致する形で発達を遂げてきた．ここでは関係・関連(respect）を意味する複合前置詞の具体例を検討することによって，それらが複合前置詞の範疇においてどこに位置づけられるか，すなわち，段階性の認められる複合前置詞の中でどの程度の発達を遂げているかを見ていく．関係・関連を意味する複合前置詞に限ったのは，この意味の複合前置詞は種類が豊富であること，また，類義関係にある複合前置詞には形式上共通する例が多く，この種の複合前置詞に関するより一般的な説明が期待できるからである．ここで扱う複合前置詞を(9)に挙げる．

(9)　a. with regard to など，N = regard の例
　　b. with respect to など，N = respect の例
　　c. その他の with/in + N + to 型の複合前置詞
　　d. as to, as for

一見してすぐに思い当たる点は Prep2 位置に to が現れやすいということである．しかし，上述の Akimoto，秋元の指摘した複合前置詞のパタンの頻度から考えると with/in + N + to 型のものは典型的ではないように思われる．これらの点も含めて以下でさらに詳細な議論を行ないたい．

1．with regard to など

N = regard の複合前置詞としては with regard to, in regard to, in regard of が挙げられる（なお，特に口語で with/in regards to のように regards を用いた形が見られるが，これについては後で動詞派生前置詞も考慮に入れて議論する）．これらはいずれも主題を導く働きを持ち，「…に関して」を意味する．

(10)　Important changes are being made *in regard to* security. (*LAAD*)

これら３者のうち，現在では通例 with regard to と in regard to が用いられる．実際，British National Corpus on CD-ROM からの検索結果でも with regard to が1657例，in regard to が283例であったのに対して，in regard of は１例のみであった．このことは歴史的事実とも一致する．*OED* では，この種の意味での regard を用いた表現として，初出（1477年）の as to the regard of と上記３つの表現をあげているが，as to the regard of は廃れた（obsolete）表現とされており，in regard of も初出時期は比較的早く，with regard to のそれと大差はないが，*OED* 全体の用例検索の結果，in regard of は1869年以降は現れていない(ちなみに in regard to については1978年まで用例が記載されている)．なお，*LAAD*, *LDOCE4*, *COBUILD3*, *OALD6*, *Macmillan English Dictionary* (*MED*) のいずれにおいても in regard of はもはや類義表現として記載されていない．

いくつかの類義表現が競合関係（rivalry）にある場合，時間の経過とともに一方が優位に立ち，もう一方は廃れるという傾向がある．この場合，時代的に新しいものが古いものを駆逐するという（秋元　2002）．*OED* を見る

限りwith/in regard to は as to the regard of や in regard of よりも後に出現していることから，この傾向に沿って変化してきたものと考えられる．ただ，with regard to と in regard to との競合関係，および，with regard to の現時点での圧倒的な優位については，歴史的な傾向と合わせて，その他の要因や以下に見る他の関係・関連を意味する複合前置詞の特徴も考慮に入れて検討する必要があるので，後に適宜触れることにする．

次に with/in regard to と文法化の関係について考えてみよう．(6)のそれぞれの観点からこの語句の文法化の度合いを調べると，(6d)(Prep1 の交替)，(6g)(指示代名詞による言い換え)，(6h)(名詞部分の交替) が可能である．ただし，(6d) の例で on the shelf が under the shelf で言い換えた場合，意味の変更も生じるのに対して，with regard to と in regard to に意味の変更はない．したがって，(6d) は考慮外となる．(6g) の場合，with regard to は当てはまらない (*with this regard) が，in regard to は該当する (in this regard)．(6h) については，以下でも見るが，交替可能な名詞は少なくとも respect, relation, reference を挙げることができるので，該当項目となる．よって，with regard to については (6h) の 1 項目，in regard to については (6g)，(6h) の 2 項目が該当することになる．

前述したように，(6)は前置詞への脱範疇化までを捉える基準であるから，典型的と考えられる instead of や in addition to などとの比較のためには，複合前置詞が談話機能を持つ語句に発達する過程も視野に入れる必要がある．それでは，with/in regard to は談話機能が備わるまでに発達しているのであろうか．一般的特徴として，談話標識は機能上，(命題内容ではなく) 発話同士を結んで話し手の意図を明示する．また，先行する発話に関連して次の発話を導入するために用いられることから，談話標識の位置は発話間，すなわち，後続する発話の冒頭部分で独立の音調単位 (コンマ・イントネーション) を持って現れる．したがって，with/in regard to がそのような文脈で用いられていれば，これらが談話機能を持つ，すなわち，文法化の点では単なる前置詞の範疇を超えたものに発達していることになる．そこで以下の例を検討してみよう．

(11) a. The company's position with regard to overtime is made clear in their contracts. (OALD6)
b. Important changes are being made *in regard to* security. (=(8))

(12) Speaker A: ... And, and, and there is the need to appoint, er, three representatives, Chairman, to serve upon this Committee, on this Whitchurch forum.
Speaker B: *With regard to* the three representatives, can I propose from the Chair that we split them very conveniently, one Liberal, one Labour, and one Conservative. (BNC)

(11a) では，with regard to overtime が修飾する範囲はthe company's position であり，文の一部に限定されている．(11b) では，in regard to security が文全体にかかっていて，(11a) の場合よりも関係する範囲は広い．しかし，ここで示される修飾関係は文レベルに留まっていて，前後にある他の文とのテキストレベルの関係を持っていない．(12)は with regard to the three representatives が後続文全体にかかっている点で，(11b) と同種のように見えるが，後続文との間に音調上の切れ目 (コンマ・イントネーション) を持って文頭に生起している点で (11b) と異なる．with regard to 句が独立した音調単位を持つのは，後続文と密接な (命題内容上の) 修飾関係をもはや持っていないことを示している．また，文頭に生じるのは，先行する発話を受けて新たな発話につなぐという談話機能を果たすのにふさわしいからである．つまり，話し手Bは「3 人の代表に関して」単に何らかの事実を述べるのではなく，話し手Aの「意見」を受けて「提案」(can I propose) という言語行為を行なっているのである．したがって，(12)の with regard to は談話機能を持つまでに発達した複合前置詞であると言える．このことは in regard to についても当てはまる．因みに，BNC での検索からは文頭の with regard to 句は1657例中322例，文頭の in regard to 句は283例中20例が見られ，いずれの場合もそのほとんどが(12)のように独立の音調単位を持っている．これに従えば，with regard to の方が in regard to と比べて談話機能の発達，すなわち，文法化のプロセスが進んでいると考えられる．

以上を踏まえて，複合前置詞の発達における with/in regard to の位置づけについて考えたい．(6)の基準 ((6d)，(6f) は除く) に従えば，with/in regard to は複合前置詞としての統語的緊密性において，典型的と見なされる instead of, in addition to ほどは高くないが，in defence of などよりは緊密性は高い (in defence of は (6c)，(6e)，(6h)，(6i)の 4 項目が該当する；詳細は Quirk et al. (1985: 672))．一方，文内副詞相当語句 (clause-internal adverbial) から談話辞 (discourse particle) への文法化のクラインに沿って談話機能を備えるまでに発達している特徴も見られることも見逃すことはできない．もちろん，instead, in addition などのように Prep2 とその目的語が省略され，単独で生起できるまでに独立性を保っているわけではないので，これらほど典型的ではないが，文法化の点から見れば with/in regard to は典型的な複合名詞句に比較的近い位置にあると言えよう．

また，with regard to と in regard to との比較に関しては，in regard to が（6g）に該当する（'in this/that regard'）ので，統語的緊密性は with regard to の方が高い．with regard to の統語的緊密性に加えて，in this/that regard が生起可能である事実，すなわち，この表現が指示代名詞の談話機能によって談話レベルの in regard to と競合するという事実（in this/that regard の文頭位置の用法は in regard to の20例よりも多く，65例）が，現時点での文レベルおよび談話レベルにける with regard to の優位性に影響を及ぼしているものと思われる．

2．with respect to など

N = respect の複合前置詞としては with respect to, in respect to, in respect of が挙げられる．ただし，現在は通例 with respect to と in respect of が用いられ，in respect to はまれ（*OED*）である．(Quirk et al.（1985: 671）の示した複合前置詞のリスト内にも挙げられてはいるが，他の類義表現と異なりそれ以上の詳しい説明はない．BNC の検索結果も０件である．ただし，in this respect, in some/many respects は普通によく用いられる表現として存在する）．また，*LAAD, COBUILD3, OALD6* 等にも in respect to への言及はない．なお，*COBUILD3*,『ウィズダム英和辞典』では in regard of が（主に）イギリス英語の用法との説明がある（*LAAD, OALD6* 等では英米間の違いについての言及は特にない）．したがって，ここでは with respect to と in respect of を考察の対象とする．

まず，これらを(6)に基づいて with/in regard to と比較してみる（with regard to は１項目，in regard to は２項目が当てはまる）．with respect to と in respect of のいずれにおいても当てはまるのは（6h)(同義名詞の置換)，(6i)(形容詞による修飾）の２項目で，in regard to の場合は指示代名詞による言い換えも可能なので，(6g) も含まれ，合計で３項目が当てはまる．したがって，項目数のみで比較すれば，with regard to > (in regard to = with respect to)> in respect of の順となる．

談話機能に関しては，with/in regard to と同様にコンマ・イントネーションを伴って文頭に生起する例（BNC では With respect to が約80例，In respect of が約90例）が認められる．また，*LAAD, LDOCE4* では with regard to を文レベルの用法と談話レベルの用法とに分けて記述しており，談話レベルでは新しい主題を導入したり，既出の主題に立ち戻ったりするために用いられるとしている．この点で，そのような区別のない in regard of よりも談話機能が発達しているようにも思える．以下の（13a）は文レベルの，(13b）は談話レベルの with respect to の例である．

(13) a. Analysts produced a detailed report, particularly *with respect to* the system's cost.
b. *With respect to* your second question, it's still too early to tell. (*LAAD*)

(13a）では「アナリストが詳細な報告書を作成したこと」について，「何に関する詳細な報告書なのか」を with respect to 句を用いて述べている．一方，(13b）の with respect to 句は話し手が「先に受けた質問について何か言いたいことがある」ことを表している（そして，それは it's still too early to tellという話し手の「態度」の表明である）．

COBUILD3,『ウィズダム英和辞典』に従えば in respect of はイギリス英語用法なので，使用範囲のより広い with respect to についての記述の方が詳しくなる傾向があるのかもしれない．実際，in respect of にも（13b）と同様の談話機能を持つと考えられる例は存在する．

(14) In respect of these erm motions, I'd like to make a couple of points on each one. (BNC)

以上より，with respect to と in respect of は統語的緊密性の点である程度の差はあるものの，談話機能の発達に関しては実質的にはほぼ同等と考えられる．また，これらを with/in regard to と比較した場合も，談話機能上の特徴が同じであることから，談話機能の発達の程度も同等であると見なすことができる．

3．その他の with/in + N + to 型の複合前置詞

N = regard, respect 以外の同様の複合前置詞としては with/in reference to, in relation to がある．これらについて，上記の表現と比較しながら簡単に見ていきたい．まず，with/in reference to は，(6)を用いた比較によれば，その統語的緊密性において with/in regard to とほぼ同等である．ただし，（6g）の指示代名詞による言い換えについては with/in regard toが該当する（'with/in this regard' が可能である）のに対して，with/in reference to は該当しない．この点で with/in reference to はより緊密性が高いということができる．しかし，これを談話レベルで考えると，指示代名詞を用いた表現は，その照応機能によって先行する文脈を受けるなどの談話機能を持つと見なすことができるので，談話機能の発達という点では with this regard のような形をもつタイプの方がその発達の度合いは高いと言えるのではないだろうか．つまり，文法化というより広い視野で比較した場合，with/in regard to の方が with/in reference to よりも典型的であると言えよう．使用頻度の面から見てもこれらの関係が反映されている．

以下はBNCにおけるそれぞれの表現の頻度と文頭に生起する用例数を比較したものである．

(15) a. with regard to：322/1657（文頭用例数／総数）
b. in regard to：20/283
c. with reference to：75/387
d. in reference to：3/68

これまでregard, respect, referenceを検討してきて，3語からなる複合前置詞の構成上興味深い共通点を見つけることができる．これらはいずれもPrep1にwithを用いる方がはるかに多いということである．regardとreferenceについてはQuirk et al.（1985）の指摘とも一致する．respectについても上述の検討から同様のことが言えることから，with + N + toが関係・関連を表す複合前置詞の典型的なタイプであると見なすことができる．

次に，in relation toについて考えてみる．この表現は統語的緊密性に関してはwith/in reference toと同様である．また，談話機能に関しても文頭表現が比較的少ない点や*in this relationという形が認められない点でwith/in reference toと特徴を共有する．その一方で相違点も認められる．まず，関係・関連を意味する表現で通例用いられる，Prep1の位置にwithを用いた表現（with relation to）が非常に少ない．また，in relation toは多義（二義）的で，「…に関して」の意味の他に「…と比較して」の意味を持つ．*LAAD*や*COB3*ではむしろ後者の意味を第1義として挙げているほどである．さらに，relation自体が「関係・関連」を主要な意味として持つ語であり，既出の表現と比べて，in relation to全体としての独自性あるいはイディオム性に乏しい．relationがPrep1としてinをとるのは，relationが既に「関係・関連」の意味を明示しているために，Prep1にはそれだけで「…に関して」の意味を持つ前置詞を必要としないのではないだろうか．これに対し，regard, respectなどは「関係・関連」が中心的な意味ではないため，Prep1に単独でも「関係・関連」の意味を表すことのできるwithを用いているものと思われる．したがって，in relation toは関係・関連を表す複合前置詞としての資格はあるが，その典型性においてはwith/in relation to, with respect toほどではないと言える．

秋元（2002）も述べているように，複合前置詞の発達には文法化のほかにイディオム化も関与しているので，厳密な比較のためにはイディオム化に関してさらに検討を加える必要がある．ただし，本稿ではこれらの複合前置詞のおおよその傾向について知るにとどめておく．

Ⅳ．動詞派生前置詞の発達

Considerなどの動詞の分詞形は文中においていくつかの異なる機能を果たす．(16)-(18)はそれぞれ分詞，前置詞，接続詞としてのconsideringの用法である（Quirk et al. 1985）．

(16) *Considering* the conditions in the office, she thought it wise not to apply for the job. ['When she considered the conditions...']
(17) *Considering* his age, he has made excellent progress in his studies. ['If one considers his age...,' 'In view of his age...'] not to apply.
(18) *Considering* that he is rather young, his parents have advised him

秋元（2002）による*OED*の調査では，前置詞，接続詞的用法の頻度が増すのは1450年以降とされる．また，前置詞的用法と接続詞的用法は初め構造上あいまいであったが，時代が経過するにつれてそのあいまい性がなくなり，文法化が進んだと判断している．(19)がその文法化の過程である．

(19) 動詞＞現在分詞＞前置詞・接続詞＞前置詞／接続詞

動詞派生前置詞の中にはconsideringのほか，concerning, regarding, relating to, touchingなど，関係・関連を意味する表現が多い．しかも，複合前置詞の場合と同様，コンマ・イントネーションを伴って文頭に生起することも可能で，談話機能を持つまでに発達しているといえる．これらについては既に秋元（2002）において歴史的考察を含めて詳細に検討されているが，ここでは特にregardの特徴について，時にconsideringとの比較を交えながら検討したい．

1．regardingと競合

*OED*におけるregardingの初出は1793年である．これには競合形のas regardingおよびas regardsがあり，as regardingは秋元によれば1688年の用例が見られる．また，as regardsの初出は1824年である．このうち，as regardingの例はかなり少なく，1800年から1900年の間にわずか2例しかなく，それ以降の例は見当たらない（秋元　2002）．実際BNCの検索でもas regardingの用例は1例も見当たらない．したがって，as regardingは競合の結果使用されなくなったと考えられる．

regardingの前置詞化には脱範疇化と意味の漂白化が関

係しており，分詞形の持つ本来の動詞性が文法化を経て失われ，前置詞的な特徴を持つに至ったとされる．as regarding の初出年が1688年と比較的古いことを考えると，時間の経過とともに as regarding における regarding も脱範疇化と意味の漂白化を起こし，as の存在意義が薄れてしまったのかもしれない．as regards に関しては regards が依然として屈折語尾-sを持つのでその動詞性が残っており，regards 単独では文法的に成立しないので as の存在は欠かせない．

2．regarding の談話機能

複合前置詞の場合と同様に regarding の談話機能について考える．前述の通り，文頭位置での生起は談話機能を裏付ける一つの証拠となることから，BNC における文頭位置の regarding 句の生起状況について検索した．その結果，Regarding 句で始まる文（142例）のほとんどが「…に関して」を表すものであった（他は「…と見なす，考える」）．また，該当する regarding 句は後続する文とコンマで区切られており，音調上も独立している．

(20) *Regarding* the management structures you have supplied, I suggest that for the smaller unitary authorities a second Assistant Director should be inserted in the proposed Planning Department structures. (BNC)

したがって，regarding も前述の複合前置詞と同様の談話機能を持ちうることが分かる．しかし，BNC で見る限り以下のような指示代名詞による言い換えができないため，この点は複合前置詞 in regard/respect to と異なる．

(21) a. in this regard/respect
b. *regarding this

もちろん，(21b) は regarding の個別の特徴であり，動詞派生前置詞に共通した特徴というわけではない．considering について言えば，数例ながら，前の文脈を受ける文頭の Considering this/that が認められる．

(22) *Considering that*, Ireland did well to win a game at all! (BNC)

また，興味深いことに，considering は単独で現れることもできる．

(23) The office was busy, but it wasn't too bad, considering. (*LAAD*)

(23)の considering は「すべてを考慮すれば，割りに」(all things considered)を意味し，意見や判断をする際の話し手の態度を表す．その意味で considering は regarding よりも談話レベルでの機能が発達していると考えられる．

以上より，regarding は一部相違はあるものの複合前置詞と同じく主題を導く談話機能を持つことが分かった．また，regarding と considering の比較から，動詞派生前置詞はその談話機能に関して段階性が認められることも明らかとなった．

V．類義表現と混交（blending）

関係・関連を表す類義表現の中で，最近になって使用されるようになったと思われる表現について，その生起理由を考えてみたい．問題の表現は以下の２種である．

(24) a. with/in regards to
b. as regards to

(24a) では regard が複数形になっており，(24b) では regards の後に前置詞 to を伴っている．BNC の検索では，(24a) については with regards to の55例と in regards to の７例が，(24b) については14例が確認された．辞書における記述に関して言えば，(24a) については*LAAD, COB3, OALD6* 等の英語辞典のいずれにも記載がない．(24b) については『ジーニアス英和辞典』に「時に」使われるとの注記があるのみである．*OED* にも記述がないことから，これらが比較的最近現れるようになった表現であることが分かる．なお，先ほどの用例では with regards to の約半数，および as regards to のほとんどが spoken text に含まれている．

(24a) の regard は名詞，(24b) の regard は動詞であるので，両者の生起については別個に説明するのが妥当かもしれない．しかし，(24a) は regard に新たに複数形語尾が付加されるという点で文法化の一方向性（unidirectionality）(Hopper and Traugott 1993)に反しており，(24b) の regards が他動詞から自動詞へという不自然な変化をしていることを考えると，両者を単に品詞ごとに説明するよりも，両者を合わせて検討することによって，その不自然さの共通の根拠を明らかにできると思われる．

これらの変化には文法化と統語的混交が関係していると思われる．(24a)，(24b) に関連する類義表現は，これまで検討の対象となってきた with/in regard to, as regards である．これらは程度の差はあれ，句内の緊密性を保持し，文法化過程を経て前置詞的機能を持つように発達してきた．ということは，それぞれの regard も句内では脱範疇化を起こし，名詞性，動詞性（の意識）が希薄にな

っていると考えられる．そこへ regard を用いた関係・関連を意味する類義表現が競合することによって混交が生じ，上記のような表現が現れたものと思われる．統語レベルでの混交には，２つの表現から１つの表現を作り出す普通の混交のほかに，ある表現が何らかの意味的・心理的影響を受けて本来の表現とは異なった形をとる混交が認められている．(25a) は慣用的表現同士の混交，(25b) は慣用表現と別の要素との心理的混交の例である．(25a) では「cannot but + 動詞の原形」が can't help ...ingと混交を起こしている．一方，(25b) では equally と意味の似た just as に引かれて equally as を生じている．

(25) a. I *can't help but* feel sorry for him.
b. He remembered *equally as* uncompromising on the other issues. (荒木・安井 1992)

これと平行して(24)を考えてみよう．まず，(24b) の as regards to は，as regard が複合前置詞の with/in regard to と混交を引き起こし to が付加されたものと考えられる．また，(24a) の with/in regards to は意味的に動詞 regard と同義であることから心理的混交を引き起こし regards 形をとり込んだものと考えられる．文法化によって範疇間の区別があいまいになっていることもこの変化を促していると思われる．

(24)の表現には２種の混交が関与しており，その背景として文法化における脱範疇化の影響があると考えることによって，一見不自然に思われるこれらの表現も自然な形で説明することができるのである．

Ⅵ. 関係・関連の概念と文法化

最後に，複合前置詞，動詞派生前置詞とそれに伴う関係・関連の意味との関係について，一般的な言語変化の観点から考える．意味変化は一般に具体から抽象への方向性を持つ．このことは前置詞についても例外ではない．最も典型的な前置詞は１語からなるもの (on, in, at) であるが，これらの多くは空間表現から時間表現へ，さらには目的や理由などの論理関係を表す表現などへと派生する傾向を持つ．on であれば，「接触 (on the table)」，「方向 (on the north)」，「時間 (on Monday)」，「関係 (an opinion on gun control)」などの意味を持ち，抽象化の方向性を認めることができる．

「関係」は抽象度の高い概念であり，この概念自体においても物理的関係から抽象的 (概念上の) 関係への抽象化の方向性が見られる．ここで興味深いのは，事態の複雑化 (抽象化) に伴って言語表現も複雑化するということである．たとえば，Quirk et al. (1985: 665-667) に挙げられれた１語からなる前置詞を見ただけでも，「位置関係 ('Relative position')」を表す前置詞は，単音節語の場合 (この場合 through１語のみ) よりも２音節以上の場合 (above, before, under など10語以上) の方が多い．もちろん，先の on のように抽象概念を表す単音節前置詞は他にもあるが，単音節語が多義的であるのに対して，２音節以上の語は意味がより限定されている (on に対する during など)．つまり，言語形式の複雑化は抽象概念を明示化し，理解を効率化するための必然的な結果と言える．

本稿で扱った関係・関連を意味する表現は物理的関係ではないので，関係概念としては抽象度のより高い概念である．それをより明示的に表すためには，多義性を排したより複雑な表現が必要となる．複合前置詞や動詞派生前置詞といった，構造上より複雑な表現がより抽象的な概念を持つのはこのためである．

Ⅶ. おわりに

複合前置詞と動詞派生前置詞は，それぞれの範疇において段階性はあるものの，文法化を経て談話機能を持つまでに発達していることが分かった．ここで扱った談話機能に関わる特徴は文頭位置での生起，および，前置詞句の独立性といった問題を中心に検討した．今後は他の談話標識との比較を通して，これらの語用論的意味についてのより詳細な検討を加えたい．

参 考 文 献

秋元実治．2002．『文法化とイディオム』ひつじ書房．

Akimoto. 1999. "Idiomatization and Grammaticalization of Complex Presositions." *The Twenty-second LACUS Forum XXV*, ed. by Shin Ja J. Hwang & Arle R. Lommel, 389－397. LACUS.

荒木一雄・安井稔．1992．『現代英文法辞典』三省堂．

Hopper, P. J. and E. C. Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge University Press.

Kortmann, B. and E. Konig. 1992. "Categorial Reanalysis: The Case of Deverbal Prepositions." *Linguistics* 30. 671－697.

Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

Swan, M. 1995. *Practical English Usage, second edition*. Oxford University Press.

Traugott, E. C. 1995. "The Role of Discourse Markers in a Theory of Grammaticalization." Paper presented at ICHLXII, Manchester.